

---

# 恋のおまじない

飯野こゆみ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋のおまじない

### 【Nコード】

N6054E

### 【作者名】

飯野こゆみ

### 【あらすじ】

私の通っている高校には代々伝わる恋のおまじないがあるの！憧れの先輩に近づけますようにと思っていたのに、偶然の再会が私の気持ちを揺さぶって。どうなる？私！

## 恋のおまじない

私の通っている高校には代々伝わる恋のおまじないがある。

私はそのおまじないをするのに必要なものを探す為、子供の頃に良く遊んだ原っぱへと久し振りに足を運んでいた。

たかがおまじない、されどおまじない。

両思いになりたいとは思っけど、そこまでは欲張らなくてもいい。

少しでも、憧れの先輩に近づけますように。

そう思っていたのだけれど……

その時すでに私の本当の恋は始まっていたのかもしれない。

「おはよう」

誰にいうわけでもなく、声を出しながらドアをぐり、自分の席に着いた。

ここは廊下側のあまり日の当たらない外れの席。

すると、直ぐに麻耶がやってきた。

「香梨菜。見つかった？」

私の顔を見れば解るでしょ！

「まだ、ちっとも見つからないよ」

学校帰りに探し続けてもう4日も経ってしまった。

私以外の子は1日、かかったとしても次の日には見つかっているというのに。

「香梨菜は集中力がないんじゃないの。」

なんて、自分は直ぐに見つかったからって！。  
少し恨めしい気持ちで麻耶を見上げた。

そう私が探しているのは4葉のクローバー。

4枚枚の葉のうち合い向かって2枚に自分のイニシャル、その間に好きな人のイニシャルを書いて、英語の辞書に挟むんだ。  
何で英語の辞書なのかは解らないけど。

そしてクローバーを挟むページも何処でもいいわけじゃなくて。

自分の誕生日と同じページに挟んで置くの。

5月31日の私は531ページという具合に。

その辞書を1ヶ月間、1日も欠かさず枕にして寝ると両思いになれる確率が上がるっていうおまじないなの！

「探す場所変えてみたら？結構目先が変わると見つかるもんなんじゃないの？」

麻耶の言葉に納得するものの。

「場所を変えちゃうと何だか負けたような気がしない？」  
「なんだか、悔しいじゃない？きつとあるはずなんだから。」

私の言葉に反応して麻耶が大声をあげた。

「香梨菜ったら可笑しいよ、負けちゃうって何？」  
その言葉に釣られて歩美と愛がやってきた。

「香梨菜が負けちゃうって？」  
歩美と愛に説明する麻耶。

「何か解るかも。」

ふと考え込む顔をみせるも、愛はにつこり微笑み、そう声に出した。  
やっぱり愛！解ってくれるんだ。  
でも、次の瞬間

「全然解らない」

麻耶と歩美の言葉が重なった。

解ってくれなくてもいいんだもん。  
今度は2人を恨めしい目で睨んでみた。

「まあまあ、みんないい加減にしなよ。2人はもう突っ込まない。  
香梨菜もそんな目でみないの。それより久し振りにみんなであそこ  
行かない？」

こうやって愛はいつも私達の仲裁をしてくれる。  
私達4人がいつも一緒にいれるのも愛がいるからかもしれない。  
生まれ月は4人の中で一番遅いのが一番お姉さんみたいな存在だった  
りする。

「私はパスかな」  
せっかく、仲裁してくれた愛には悪いけど、天気もいいし、今日こそ  
見つけられそうな気がするんだ。

「香梨菜行かないの？あんたが一番好きなのに！」  
麻耶に言われた。

私だって、こんな風に断る日があるなんて思いもしなかったよ。

あそこというのは1つ先の駅近くのケーキ屋さん。  
そのイチゴショートは絶品！  
生クリームは甘いのにくどく無くていくつ食べても飽きないくらい。

でも、予算の都合で2つまでしか食べたことはないけどね。

そんなことを言っていたらチャイムが鳴った。

がやがやとしていた皆の声は席に着く為に引かれる椅子の音によって掻き消される。

高校に入学して3ヶ月が過ぎようとしていた。

私は放課後の4葉探しに気持ちが飛んでいたようで、かなり上の空だったらしい。

ちよつと大げさかもしれないけど、あつという間に放課後になっていた。

「香梨菜あ、本当に行かないの？」

歩美がひじを突つついた。

「美味しいぞ。苺だよ。もうシーズン終わっちゃうんだから」  
今度は麻耶まで私の前に来て誘いに来た。

ちよつと後ろ髪をひかれるも、ここは4葉の方が重要だ。  
想像しただけでも涎が出てきそうなのを堪えて、教科書をカバンに詰め込んだ。

「じゃあ、お先に」

振り返りもしないで一目散に教室をでた。

あのままあそこにいたら、誘惑に負けちゃいそうだったから。

学校から私の家までバスで20分。

バス停から徒歩で3分の場所にある。

バス停に着くと発車時刻3分前。

タイミングはバッチリで今日こそ見つけられそうな気がした。

直ぐにバスは到着して

先輩に振り向いてもらえますように

まだ見つけてもいない4葉を思い描きながら、バスに揺られた。  
バスに乗りながらもちよつとした公園が見えるとあそこにもあるんだろうなあなんて、思ってしまった。

ぼーっと外を見ていたら私の降りるバス亭だった。

バスから降りると歩く時間も勿体無くて少し早足で家に向かった。  
家に着くと靴を脱ぐ事もなく、玄関にカバンを置くと

「ちよつと出かけてくるー」

と家にいるだろう母さんに声を掛け返事を聞く前に自転車に飛び乗った。

「さあ今日こそ見つけてやるから、待ってなさい4葉あー」

心の中で叫びながら、公園へ向かったのだった。

初恋の人？！

公園は天気が良いせいか、小学生がいっぱいいた。

私がいつも4葉を探している原っぱは、ボール遊びが出来るので近所の子供達で溢れかえっていた。

キャッチボールをしている子、サッカーをしている子達がいるのでちよつと怖かったけどそんなことを言っている場合じゃない。

早速私は地面に這いつくばった。

昨日はここら辺まで探したよなあ。

独り言を言いながら、じーっと地面を見つめる。

子供の中で制服を着ている私は異様に目立っていたようで、30分も経つと幾人かの子供達にからかわれ始めてしまった。

「ねえちゃん、パンツ見えてんぞ」

えっっ。

慌ててスカートを抑えてみる。

すると今度は

「ウソだよー、引っかかってやんの！」  
といいやがった。

このーくそガキと心で思ってみるも、今は4葉、4葉と意識を集中させて無視する事にした。

すると子供達は私が相手にしなかったせいか、元の遊びへと戻って行った。



今度はスカートを気にしつつ、また地面と睨めっこ。

それからまた30分程した頃だろうか、さっきのガキンちよの声が

「ねえちゃん、危ない！」

私は、またかい今度は騙されないんだからと思った瞬間。

”ボスっ”と私のお尻にもの凄い衝撃が……私の横にサッカーボールが転がった。

痛い、痛すぎる。小学生でもこんな威力のあるボールを蹴れるものなの？！

途端に子供達の笑い声が聞こえた。  
最悪だ。

お尻をさすりながら、振り返ると、目の前に見覚えのある男が笑いを堪えながら立っていた。

「悪い、浅田。」

そう言ったのは小中の同級生、今野陽人だった。

「今野だったの今のボール蹴ったのは！それに笑いながら謝ったって嬉しくないわよ。」

勢いでそう言ったのだが、改めて見ると久し振りに会った今野は感じが変わっていた。

背も伸びてして髪型も違うせいかな、少しかっこよくなった？  
でもそう思ったのは私だけだったようで

「お前、ちつとも変わってねえなあ」  
と言われてしまった。

前言撤回決定。

「大きなお世話です。」

まだ痛いお尻をさすりながら、ロスした時間を取り戻す為にまた地面に視線を落とした。

すると、近くで様子を見ていた子供達がやってきた。  
その中の一人が

「このねえちゃん、兄ちゃんの知り合いなの？」  
と聞いてきた。

あのパンツのことを言ったやつだ。

兄弟だったんだあ、言われてみれば少し面影があるかも。  
っていうか、こんな奴だったよ今野って。

お調子もので、いつも人の事力ラかっていたっけ。

すると今野はとんでも無いことを言い始めた。

「おう、兄ちゃんの初恋の人だよ」

さらーっと、同級生だというノリで今野は言った。

カーッと身体が熱くなった。

は・初恋って。私ですかー。

途端に子供達が騒がしくなった。  
囃子たてるガキンチョども。

でも私の思考回路はついていけなくて。

実は私もいいなと思った事が無いわけではないのだけど、ノリが良くて、話をしてても楽しくて。

でも今野も彼女がいたし、私もその頃は彼氏がいたし。ただそれだけだった。

「初恋だったけど、今は違うぜ。俺、彼女いるし。告白じゃないから安心しろよな」  
って笑いだした。

ほっとしたけど、少しショックだった？

ショックだったー？！

今だって先輩に近づけるようにって4葉を探しにきているのに、何考えてんの私ってば。

今野とはいくと、何事もなかったかのような顔をして、まだからかい続ける弟達に

「とつとと練習してろ。」

と一喝いれると、再び私の方を向いた。

「気がつかなかったろ」

今野の言葉に思わず頷いた。

「やっぱりなあ」

と言って頭を掻きながらはにかんだ笑顔をみせた。

そんな今野にドキッとしてしまう私。

何、なんなのこのドキドキは

「悪かった、こんな事言つて。でもさつきも言つたように俺今彼女いるから忘れてくれよな。初恋の人ってのは変わりないけどな。そっういや、浅田何してたんだ。コンタクトでも探してるのか？それなら手伝うけど。」

そういう今野に慌てて首を振つた。  
まさか恋のおまじないの為に4葉を探しているなんて恥ずかしくて言えないから。

「違うの、コンタクトじゃないんだけど。大丈夫だから、ほら弟君待ってるよ。行ってあげて。」  
と今野の背中を押した。

「そうか？大丈夫ならいいけど。じゃあ」  
そう言つて手を挙げ今野は走りだした。

私は思わず  
「今野ー嬉しかったよー」  
つて言つてしまった。

今野は一瞬立ち止まり、前を向いたまま片手を突き上げた。

そっかあ今野は彼女がいるんだあ。  
中学を卒業して3ヶ月。  
少しかっこよくなった彼の後ろ姿を見送った。

そうそう、私は4葉を探さなきゃ。  
ふと足元を見るとあんなに見つからなかった4葉が今まで今野が立っていた場所に有った。

今野のお陰かも。

大事に摘み取るとハンカチに包んでポケットにしまった。

## 揺れる想い

机に向かつて、じーっと4葉を見つめる。  
あれほど探していた4葉なのに私はイニシャルを書くのを迷っていた。

大好きだと思っていた先輩の顔が思い出せない。  
浮かんでくるのはあの公園であつた今野の顔ばかりだった。

何やってんの私。

今野は彼女がいるっていつてたじゃない。  
ちよっと初恋だって言われたからって反応している自分が怖かった。

頭の中を空っぽにしたいくて何度も首を振った。  
目が回っただけだった。

明日学校行つて先輩の顔みたら復活するよね。  
よし、今日はもう寝よう。

先ほどのように大事に4葉をハンカチにくるみ、引き出しの奥へしまった。

この時点で本当は解っていたんだ。  
既に今野を好きになり始めている事を。

「また駄目だったんだあ。」  
麻耶が話し掛けてきた。

結構暗い顔していたのだろうか？

自分ではそう思っではないんだけど。

「うっうん・・・」

嘘をつくつもりじゃなかったのだけど思わずそう言ってしまった。  
愛は私の肩を叩いて

「あんまり根つめちゃ駄目だよ。」  
って言ってくれた。

ごめん。

そんなに優しい顔しないで。

本当は昨日見つけてしまったのだから。

それは4葉ではなく初めから上手く行くことのない恋の相手なのだから。

「ほら、元気出して、渡り廊下行くんでしょ！」

歩美の言葉にはっとした。

次は神田先輩の体育の時間。

神田弘樹先輩。

1つ上のサッカー部、

サラサラヘアーに、小顔で、背も高く、頭も良い。

我が校のアイドル的存在だ。

昇降口から校庭に行く姿を毎回欠かさず見ていたのに、今日はすっかり忘れていた。

そんな私の様子を愛はじつとみていたのを気がつかなかった。

「やっぱり、今日も格好よかったねえ」

歩美の言葉に頷く私。

「何かテンション低くない？」  
麻耶が私の顔を覗き込んだ。

「そんなことないよ。」

そんなことないよ、と言いつつ今度こそはつきり解ってしまった。  
ドキドキが違うのだ。

確かに格好よいけど

素敵だと思うけど

あの今野の顔を見たときのドキドキとは全然違っていたのだから。

恋をする前から解っていたことなのに気持ちさがドーンと沈んでいったのだった。

なんで会っちゃったんだろう。

あの時イチゴショートを食べに行っていたならこんな思いをする事なかったのに。

おまじないかあ。

4葉のクローバーが頭を過ぎる。

そして彼女いるからと笑ったあいつの顔が頭から離れなかった。

教室へと戻る廊下で愛が

「何か悩み事？さっきからため息ついてるよ。大丈夫みんな気がついていないから。」

視線は前を向いたまま、私だけに聞こえるような囁き声だった。

どうして愛はわかるんだろう？

相談しても大丈夫かな？

彼女をいる人を好きになるなんて軽蔑されないかな。



そんな思いが駆け巡り躊躇してしまう。

「大丈夫だよ。ただちよつと疲れただけ。」  
私も愛だけ聞こえるように囁いた。

了解とばかりに愛はこくりと頷くと前を歩く麻耶と歩美の話に混ざっていった。

3人の後ろ姿を眺めながら、昨日までの私を羨ましく思ってしまった。

「香梨菜今日も探しに行くの？」  
麻耶の言葉にちよつぴり胸を痛める。

本当はあるんだよ、昨日見つけたんだ。  
そういえばいいのに何故か言えない私。  
どうして嬉しそうじゃないの？と聞かれるのが怖いのもかもしれない。

「今日は何だか疲れてるから家でぼーっとしてるよ。」  
”ぼーっとしてるって”  
言ってる私が恥ずかしい。

「そうだよ、その方がいいかもよ。ゆっくり休んで明日に備えなつて。」

歩美はにこつと笑って私の頭を撫でた。

愛は黙って私を見ていた。  
勘が鋭いからなあ。

人を気遣う事の出来る愛はみんなの様子を良く見ていてさり気無くフォローもいれてくれたり。  
バッチリ目が合い愛もまた優しい笑みをみせてくれた。

ごめんよーみんな。

心の中で何度も謝った。

帰りのH Rが終わると直ぐに家へと向かう。

家に着くと制服も着替えずにまた机の上の4葉と睨めっこ。  
1時間以上悩んだものの結局私はイニシャルを書いて

そおつと英語の辞書にクローバーを挟んだ。

今日から宜しくね。

少々ごついがこの際我慢だ。

ちよつとの不安を抱えつつ食事をする為に部屋を出た。

## イニシャル

あれから2日後。

やつと私は4葉を見つけられたことをみんなに話せた。

みんな口々に

「良かったね」

と言ってくれた。

でも誰の名前を書いたかは言えなかった。

そもそもみんなは私が先輩以外のイニシャルを書くとはこれっぽちも思っていなかったようなので何も聞かれなかったのだけど。

1カ月後が楽しみだね。

なんて嬉しそうに話をしていた。

でも実際は私と愛以外は彼がいたりなんかする。

それでもおまじないをしているのは、ずーっと一緒にいられますように！

と願う事らしく、恋のおまじないという行為を楽しんでいるようだった。

英語の辞書に4葉を挟んで1週間経った。

相変わらず私は渡り廊下に立っている。

勿論先輩を見ることが一番の楽しみではなくなっていたのだけれど、麻耶達に連れられて断る事もできずにそのままこうしている。

いつもと変わらず先輩の後姿を見送っていた。

「あー行っちゃった。」

歩美が呟くと、いつもだったら校庭へと消えて行く先輩が、くるっ

と向きを変えて戻ってきた。

そして、渡り廊下を見上げて目が合った？！

今までだって、下校の時など偶然を装って近くを歩いてみたりするも、先輩の視界になんて入った事なかったのに。

こんなこと初めてだった。

しかも先輩は少し微笑んでくれたようにも見えた。

麻耶も歩美も愛も良かったじゃん。

と先ほど起こった現実にニコニコ顔だ。

「うん」

言葉すくなく答えてみる。

”照れない照れない”なんて麻耶の声にもどう反応したら思い浮かばなかった。

もう限界だ。

1週間も黙っていた事素直に謝ろう。

心の中で決心した。

放課後思い切って声を掛けた。

「ねえねえ、今日さあそこ行こうよ！」

でも返ってきたのは

「「ごめん」」

麻耶と歩美の声が重なった。

「梅雨の晴れ間で天気が良いから出かけようって言われて・・・」

麻耶が言うと

「同じく」

歩美も同じらしい。

そっかぁデートじゃしょうがないよね。

折角勇気を振り絞って声掛けたのに、こんなものよね。

「私空いてるよ。たまには2人で行こうか。」  
愛が言ってくれた。

「うんじゃあ今日は2人で行って来るから。」  
私がそういうと、ごめんねーと言いつつ麻耶と歩美はささ々と教室を出て行ってしまった。

「さあ、私達も行こう!」  
愛に引っ張られて教室を出た。

昇降口まで来たら校門の先に誠君と一緒に歩美を見かけた。  
後姿でもとても嬉しそうって解った。

「仲良いよね」

愛も目に入っただみだった。

「羨ましいなあ」  
勝手に口が開いていた。

「続きはゆっくり聞きましょう」  
愛はにっこり笑い

「ねえ、私達もデートしない？こんなに天気がいいんだから！」  
と言い出した。

「デート？」

「そうデート！コンビニでお菓子と飲み物買って公園行こうよ」  
はしゃぐ愛に釣られて

「いいね！公園デート。行こう行こう！」

そうして30分後、私達はあの公園に来ていた。

「いい公園だね。ここで4葉探しててたんだ」  
周りを見渡してきよろきよろする愛。

「そうなんだ」

あの時以來きていなかった原っぱに腰を下ろした。

1つ、2つ呼吸を整えて

「あのね、私好きな人が出来たの。」

愛は私の顔を見て

「その割には、あんまり嬉しそうじゃないね。」  
と言った。

やっぱり解るよね。

私は出来るだけ解り易いように言葉を選んで愛に説明した。  
ところどころつかえてしまう私に

「ゆっくりでいいから」

と優しい声を掛けながら背中をさすってくれた。

言い終わると緊張の一瞬。

愛はなんて言うんだろう。

軽蔑しちゃうかな？

彼女のいる幸せそうな相手の名前をクローバーに書いてしまった事。

「そっかあ。確かに彼女からしてみれば不愉快極まりないけど。人を好きになるって単純じゃないからね。」

軽蔑はされなかったけど、いいとも悪いとも言わなかった愛。

最後に

「だって、香梨菜が一番解ってるみたいだから。1つ言えることは麻耶だって歩美だってずつといられますようにっておなじないしてるでしょ。誰でもこの先の不安はちよつとはあるんじゃないのかな」と付け加えた。

愛に話せた事でちよつとだけ気持ちが軽くなった。

確かに、彼のイニシャルを書いてしまった事で罪悪感がある。

他人の不幸せを願ってるみたいで自分が嫌いになりそうだった。

先輩のイニシャルを書いたら違ってたんだろうけどなあ。

ふと考えた。

「あーっ」

問う突然声をあげた私に愛が不思議そうな顔をした。

今野陽人

こんの・はると

神田弘樹

かんだ・ひろき

2人共イニシャルが同じだった。

今頃気がつくなんて、ちょっと間抜けじゃない。

話を聞いた愛もちょっと抜けてるかも！なんて笑い出した。

いつの間にか辺りも暗くなってきたので一度私の家に行き母さんに会いを送ってもらうことにした。

愛の家まで母さんも交えてのおしゃべりは止まらず、とっても楽しい車内だった。



## 友情の証？！

昨日の夜は携帯で遊び過ぎて寝るのが深夜になってしまった。  
今日は日曜日。

いつもの時間に鳴った目覚ましを止め再びべつとに潜りこんだ。

「香梨菜！いつまで寝てるのー」

大きな声を出しながら母さんが部屋に入ってきた。

「良いじゃん。今日は日曜だよ。もう少し寝かせてよ。」

そういつて、やっとこ慣れてきたごつごつ枕に頭を乗せる。

「あーそれ、もしかしておまじない？！」

母さんが興奮しながらベットに腰掛けた。

その声に飛び起きる。

「えー母さんの時からあるの！」

何を隠そう私の通っている光洋台高校は母さんの母校だったりする。  
所謂先輩だ。

「母さんの時からって、その”おまじない”だって母さん達が考えたんだもの！」

ここ最近で一番のニュースだった。  
驚いたのなんのって。

「それで、名前書いたのはこの前の愛ちゃんなの？」  
母さん何だか嬉しそうだ。  
でも愛ちゃんって？

私は寝起きも手伝って思考回路ショート寸前。

「なんで愛ちゃん？」

私が聞くと

「だって友達でしょ？」

と会話が微妙に繋がらない。

「ちょっと待ってて。」

母さんはそういうと、隣の部屋の屋根裏部屋へと上がっていった。

暫くして母さんの手には

光洋台高校の卒業アルバムと1冊の英語の辞書があった。

母さんがページを開くその場所には母さんの友達。

母さんを含め私も良く見知った人たちが、英語の辞書を持ってスナップ写真に納まっていた。

優さんでしょ、真理さんでしょ、それに幸子さんに母さん。

みんなたまに遊びにくる人達だ。

それにしても母さんが私と同じ制服を着てるなんて！  
不思議な感じだった。

そして、英語の辞書の

friend

というページを開くとすっかり乾燥された大きめのクローバーが挟んであった。

母さんは自分達4人がいつまでも友達でいられますようにとの願いを込めて、一枚一枚に自分達のイニシャルを書き”友達”という単

語のページに挟んで枕にしようと考えたらしい。

何故1ヶ月なのかといとその友達の優さんが卒業式の1週間後に引越しをしてしまう事が2月に解ったから、それでみんなずっと友達でいられるようにとおまじないを考えたそうだ。

何故英語の辞書かというと、国語の辞書だと高校卒業しても頻繁に使いそうだから4葉がなくなりそうだと笑う母。

確かに大学さえ行かなかったらあまり辞書を引く必要もないだろうからね。

あくまでも、母さん含め、友人達の話だけだ。

私達のおまじないとは少し違うみたいだ。

好きな人のイニシャルを書いてなんて、とてもじゃないけど母さんには恥ずかしくて言えなかった。

何とかお母さんの追求をまのがれ、お腹が空いたと母さんと一緒に部屋を出た。

母さんは私にパンを渡すと”自分でやって”と電話に向かった。そう電話の先は母さんの友人の一人、誰だかは解らなかったけど

「そうそうあのおまじないがね・・・」

なんて話す母さんは嬉しそうだった。

私がトーストを食べ終わっても母さんの電話は終わらず、テーブルに

「公園に行ってくるね」

とメモを残し自転車に乗って公園へと向かった。

私に愛に歩美に麻耶。

丁度4人組みだ。

私達もやってみよう！そう思いたってまた4葉を探しにきたのだった。

原っぱに着くとまたはいつくばって4葉を探し始める。  
暫くすると

「あーパンツのねえちゃんだ！」

と元気のいい声が。

あれ程生意気なガキンちよだと思っていたのに、今野の弟だと解ると可愛く思えるのはいかなものだろう。  
げんきんな私だ。

「こんにちは」  
というと

「今日はスカートじゃないんだ」  
とこれまた可愛くない一言を。  
こいつも学校でお調子ものなんだろうな。  
なんて思っていたら

「ねえちゃんもさあ陽人兄ちゃんの事好きだったりする？」  
なんて爆弾発言をした。

「えっ、ねえちゃんもってあんたの兄さん、ちゃんと彼女がいるんですよ？」

小学生相手に動揺しつつそう言つと

「さあ、俺は知らないよ。見たことないし、それに兄ちゃんサッカーばかりで遊んでる暇なんてなさそうだけど。」  
弟君はそう言った。

そういえば中学もサッカー部だったっけ。

それはおいといて、彼女のことは、弟が見たことなくなつて、本人がいるって言ったのだから間違いないだろうけど。

「あの後さ、兄ちゃん。あんたと会ってから妙に機嫌が良くてさ。なんて嬉しいことを言ってくれる。」

でも私は期待なんかしちゃいけないとばかりに

「じゃあ、彼女といい事でもあったのかもよ。」

自分で言つて落ち込んだじゃう。

別な事があるだろうに。

「ふーん」

どういつ訳か弟君は私の隣に座つて私の視線の先を見つめている。

「あつた。あつあつちにも。」

意味深な言葉を言い出した。

「お姉ちゃん、どこみてんの？どおりで、何日もいつくばってる訳だ。」

とけらけら笑いだした。

情けない。

「じゃあ、またねー」

と弟君が去っていった。

先ほど彼の落とした目線の先には、確かにあっちにも、その向こうのあっちにもりっぱな4葉があったりして。

どこ見てるの私ってば。

集中力のなさなのか、大雑把なのか。

どちらにしても駄目な奴じゃん。

そう思った。

## 罪悪感

月曜日、早速皆におまじないの話をした。

「なるほどねえだから英語の辞書だったんだ。」  
納得納得とばかりに頷く麻耶。

「まさか、香梨菜の母さん達が考えたとはね」と歩美。

「時代と共におまじないも変化してきたわけかと愛。」

3人それぞれの意見を言った後は

「やるしかないでしょ！」  
と全員一致の答えだった。

「じゃあ、最後に見つけた香梨菜のおまじないが終わった後ね」  
愛が言った。

そっか、そうだよね。

1つお願いしているところだから、一緒に挟むのはタブーかもね。  
良かったあもう探しちゃったって言わなくて。

そのうちに干からびちゃうよね、4葉のクローバー。  
今のうちにパウチかけてしおりにでもしてみよう。

そして、私は麻耶と歩美にまだ話せないでいる。  
この前決心したのに、やっぱり彼氏持ちの彼女達には言えないでい

た。

愛は自分で言えるようになったらで大丈夫だよ。  
と言ってくれたのだけど。

そんな中歩美が

「ニュースニュース。来週サッカー部が海南校と練習試合するってよ！」

ラッキーじゃん。神田先輩の試合うちの高校で見れるなんて！  
と私に微笑む麻耶。

私は海南高校という名前に反応していた。  
今野が行ってる学校だ。

すると歩美が

「あーもう、香梨菜ったらもう赤くなってるよ。」  
と私をからかった。

違うんだよ！とも言えず。

「あはははっ」

と乾いた笑いしか出てこなかった。

愛だけは事情をしっているので困った子だと言わんがばかりに私の肩をポンポンと叩いた。

あれから全く会っていなかったので私は妙なドキドキが止まらなかった。

雨降らなきやいいな。



それより湿気で髪の毛はねないように気をつけなくちゃなんて考えてしまった。

その頃からだろうか？何故か神田先輩と目が合うような気がするの  
は。

目が合うだけでない、笑いかけてくれているような気がするのだが。  
はて？都合の良い解釈をしているだけなんだろうか？

そうして、ある日の放課後。

いつものようにバスに揺られていると、歩道に1組の男女がいた。  
仲よさそうに、肘で相手の腕をつついたり、つつつかれたり。

仲良しカップルだ。

なんて、のほほんとしていたら、急に胸がキューンを苦しくなっ  
てしまった。

そう、そこにいたのは今野だった。

隣にいる人は誰だか解らないが、うちの高校の制服を着ていた。  
1年じゃないと思う。

年上なのかな？

今野の手には彼女のだろうスポーツバックが握られて。

知らないうちに涙が溢れて止まらなかった。

あんなに仲の良い2人なのに。

誰がみても私は邪魔者だね。

それにしてもこの涙はいつ止まるんだろう。

私の降りるバス停が近づいても涙が止まることはなかった。  
仕方なく、ハンカチを目にあてバスを降りた。

家に帰るとすぐにベットに倒れこみ、顔を布団に押し付けた。

見たくなかった

涙が止まらないまま私は制服姿で寝てしまった。

ふと気がつくと夜中の3時。

机の上には

「少しでいいから、食べなさい」

と書いたメモとおにぎりが2つ並んでいた。

泣きすぎたせいか、あんなにシヨックだったにも関わらず私は食欲があるようで結局2つとも食べてしまった。

でもちつとも元気はでなかったけど。

今更ながらに制服を脱ぎパジャマに着替えた。

顔が腫れぼったいのが解る。

あんだだけ泣いたのだから当たり前って言えば当たり前なんだけど・

・  
鏡を見るのがとっても怖かった。

そして、やってはいけないと思いつつ、英語の辞書を枕にしてしま  
う私。

自分が嫌いになりそうだった。



## 現実逃避

きて欲しくないと願っても毎日朝はきてしまうもので。  
いつそ夢だったら良かったのになんて思っても虚しいだけだった。  
泣き疲れて、身体もだるかった。  
休みたいな。

すると、

「香梨菜、起きたの？」

と母さんが部屋に入ってきた。

母さんは何も言わずに私の顔をそつと撫でてくれた。

目線を机に向けてお皿を確認したのだろう。

小さく息を吐き

「休む？」

と聞いてきた。

「いいの？」

「お母さんだって、女の子だったわよ」

と立ち上がって、ポンポンと私の頭に2度手を置いた。

そして、空になったお皿を持って部屋を出て行った。

安心した私はもう一度ベットに潜りこんだ。

でも目をつぶると昨日の楽しそうな今野の顔が浮かんできてあんなに泣いたのにまた涙が零れてきた。

初めから解っていたことなのに

そう、初めから解っていたのだ。

それなのに今野を好きになってしまったのだ。

誰が悪いわけでもない、自分が悪いだけなのだ。

あんなに楽しそうな彼女を彼から引き離そうとしている。  
おまじないをしていると言う事はそういう事なのだから。

何度考えてもそこに答えがたどり着く。

学校を休みたかったのは自分なのだが、こう一人で部屋に籠っていると頭がパンクしそうだった。

何か飲もうとキッチンへと向い冷蔵庫を空けた。

よく冷えたウーロン茶をコップに注ぎ一気に飲み干した。

「どう？たまにはおばあちゃんのとこ行こうか。おじいちゃんお友達と温泉旅行行っておばあちゃん一人なんだって！」  
唐突に母さんが言った。

そういえば最近行ってなかったな。

私は直ぐに頷いた。

「そうと解れば、ハイ。」

そういつて渡されたのは保冷剤。

目を冷やせつて事だね。

「ありがと。」

そっいつて洗面台に置いてあるタオルにくるんで目に当てた。

ひんやりして気持ちが良かった。

それから30分後、

「どれどれ？」

なんて私の顔を覗き込む母さん。

「まあ、こんなもんでいいでしょ。」

と私から保冷剤を取り上げると、準備準備と私を2階へ押しやった。

まだ、腫れぼったいのは解ったけどしょうがないもんね。

気分を変える為にお気に入りの服を取り出すと鏡をみないように袖を通した。

ふとベットに置いてある辞書が目に入る。

誰に向かってなのか

「ごめんね」

と呟いて母さんの待つリビングへ降りていった。

おばあちゃん家は車で1時間。

道が空いている時には40分位でつくのだけど、今日は平日の午前中。

渋滞は真逃れないところだ。

私の気分とはうって変わって天気は良好。

渋滞さえなかったら最高のドライブ日和だった。

「なんで、こんな道混んでるのかしらねえ」

なんて言ってるけど母さんはべつにイライラした様子も見せず、ラジオから流れているメロディを口ずさんでいる。

懐メロらしく私にはさっぱりな歌だった。

「あつあんなところにお店あったっけ？」

母さんの言葉に目を向けるとそこにはログハウス風の可愛らしいお店があった。

「寄っちゃう？美味しいケーキあるかもよ！」

母さんは私が断るとは思っていないようで、私が返事をする前にウインカーを出し、車線を変更していた。

「勿論！」

遅らばせながら返事をした。

母さんはにっこり笑った。

お店へ入るとやっぱり正解！

お店の中はまるで森の中の喫茶店？！んゝ表現不足で申し訳ないけど素敵なお店だった。

「どうする？おばあちゃん家までもって行く？それともここで食べちゃう？」

いたずらっ子のように笑う母さん。

ちよっと可愛いなんて思ってしまった。

「今度また食べに来ようよ。おばあちゃんと一緒に食べたいな。」  
と私が言うと

「それでこそ、我が子だよ」  
とご満悦。

そして、私が選ぶのはやっぱりショートケーキだった。  
お母さんは”オペラ”おばあちゃんには”モンブラン”を買ってお

店を出た。

久しぶりに会ったおばあちゃんはいつもと変わらず優しい笑顔に向けてくれた。

「今日は学校お休みだったのかい？」

と聞かれ、曖昧に頷いてみる。

お母さんも何も言わずにそのまま3人でケーキを食べ他愛もない話をしたりして、おまじないのことは全く思い出さなかったとは言えないけど、ほんの少しだけ気持ちが落ち着いていた。

私を無条件で可愛がってくれるおばあちゃんの家だったからかもしれない。

楽しい時間もあったという間に過ぎて夕方になってしまった。

おばあちゃんも夕飯食べていく？と言ってくれたけど、明日も学校があるし父さんも帰ってくるから帰ることにした。

尤もおばあちゃんでご飯を食べたとしても、お父さんは良かったなと言って言うだろうけどね。

そんなお父さんだからお母さんは帰ろうと言ったのかもしれない。子供の私がいうのもなんだけど両親はすごく仲が良いんだ。照れくさいから言わないけどちょっと自慢の両親です。

家に着いたら、お母さんはテキパキと夕飯の準備を始めてあつという間に出来上がった。

見事な手際の良さ！私がそういうとお母さんは香梨菜もそうなるわよとふわつと笑った。

夕飯を食べ終え、お風呂に入りまた寝る時間になってしまった。ベットに腰掛けて、じつと英語の辞書を見つめる。

心苦しかったけどまた枕にしてしまった。



後1週間かぁ。

ただのおまじないされどおまじない。

1週間良心との葛藤は続くんだろっな。

そう思いながら眠りに着いた。

## 応援

とうとう今日で1ヶ月。

結局今日まで枕にしてみました。

おまじないをしたからって両思いになれるとは思ってはいなかったけど、とても複雑な心境だった。

学校へ着くと早速歩美が近寄ってきた。

「おはよー。確か香梨菜のおまじないって今日の夜で最後だよねー。」

ニコニコしながら私の顔を覗きこむ歩美。

「うん。」

そう頷いてみるものの。

私の心は複雑で。

「最近元気ないじゃん。どうしたの？でも明日はお楽しみだからね。私まで気合入っちゃうよ！」

なんて。

そっか、明日だっけ。

明日の土曜、私達の高校と今野の学校の練習試合がある。

見たい気持ちはあるのだけど、サッカーしている今野を見てしまうともっと好きになってしまいそうで怖かった。

行きたいけど行きたくない、それが本音だった。

「そうだね。」

作り笑顔で歩美に答えた。

昼休み、次の美術授業のため、教室を移動していると廊下の先に神田先輩がいた。

神田先輩は友達に囲まれて大声で笑っている。

知らないうちに頬が緩んだ。

やっぱり格好良いよな、なんて。

でも知ってしまったから、本当に好きな人とのドキドキの違いを。

すれ違う瞬間、神田先輩は私を見て笑ってくれた。

笑ってくれた?!

気のせいかと思っただけど、麻耶と歩美はキヤーキヤー騒ぎだした。

「「香梨菜いつの間に!」」

2人は声を揃えて私を肘で突っついた。

私の方が聞きたかった。

なんでだろう?

愛だけは何も言わずに隣を歩いていた。

そうこうしているうちに土曜の朝はきてしまっ

私はまた英語の辞書を枕にしてしまった。

とうとう1ヶ月。

私の葛藤も今日でおしまい。

ちょっぴりホッとしている私がいた。

今日の試合もちょうかりみんなと待ち合わせまでしてしまっ

も心の中ではまだ迷っていたりもする。

ドタキャンしちゃおうかな

つて。でもそんな私の心を見透かしてか、待ち合わせ1時間前に愛からメールが届いた。

「行くよね。」

ただ一言、それだけ。

返事は中々出せなかった。

風邪をひいた、頭が痛い、おなかの調子が悪くて……

いろいろ断る理由を考えてみたのだけれど、学校の違う今野に会うことはそんなにない訳で。

これ以上好きになってしまうのは怖かったけど、今野の姿を見てみたい気持ちが勝ってしまった。

待ち合わせにぎりぎり間に合う時間に

「行くね」

と愛に返信した。

直ぐに

「待ってるよ」

と返ってきた。

私の返信を待っていてくれたのかもしれない。愛らしいな、って思ってたちょっと嬉しかった。

慌てて制服を着て学校へ。

土曜日とはいえ学校へいくので他校の生徒以外は制服着用だ。

みんなと校庭へ行くと、試合時間はまだだったが、両校の選手はアップの為既にグラウンドで練習していた。

その中に今野の姿を見つける。

我ながらその見つける速さにビックリした。

好きな人というのはこんなにも周りの人と違うのだろうか。

そのうち麻耶に

「香梨菜どこ見てるのよ。」

と呆れ顔をされてしまう。

歩美も

「照れてるの？顔赤いんじゃない？」

なんてニヤリと笑う。

愛は事情を知っているせいか、相変わらずにこつと笑っただけ。

麻耶と歩美は

「やっぱり神田先輩はめの保養になるねえ」

なんて言っている。

彼氏に聞かれたら大変だなんて思ったりして。

私はやっぱり今野に目が行ってしまふ。

中学を卒業してそんなに経っていないのにこんなに感じが違うものだろうか？

それとも私の見る目が違っているから？

そして、試合が始まった。  
驚いた事に今野は1年生だというのに、ピッチに立っていた。  
凄いじゃん。

始まりから、白熱した試合だった。

ボールは両方のゴール前まで行ったり来たり、でも寸でのところ  
でボールを奪い返して。

私は両手を握り締めながら、ボールの行方を追った。  
今野がボールに触る度に、両手の爪が手に食い込む。  
そして、もう少しでハーフタイムというその時

「陽人行けーっ」

と一際大きな声がした。

声の方を見るとそこにはあの時の彼女がいた。  
彼女は頬を赤くして、一生懸命応援している。

私達の高校の制服を着ているのにそんなことはお構いなしとばかり  
に。

麻耶もあの人凄いねえなんて言っている。

私は居たたまれなくなつて。

目がちよつとウルつとしてしまった。

そんな私に愛が気づいた。

「大丈夫？」  
と。

「ちよつと目にゴミが入ったみたい。顔洗ってくるね。」  
と水道へと走った。

駄目だよまだ、涙でちゃ駄目。

自分で自分に言い聞かせ水道へと急いだ。

思いつきり蛇口を捻り顔を洗った。  
何度も何度も顔に水を浴びさせて。  
動揺した心まで冷やすように。

## 一緒に帰ろう

いつの間にかにハーftimeに入ったようで、水道に向かって歩いてくる足音。

慌ててポケットからハンカチを取り出し顔を拭った。

泣いている顔を見られたわけではないのに、恥ずかしくなってハンカチで顔を覆ったまま2歩下がった。  
ちよつとした段差に気がつかずバランスを崩してしまった。

「「あつ」」

その場に転んでしまふかと思ったのに、私は後ろから誰かに支えられていて。

「ありがとうございます」

そう言つてハンカチを下げるとそこには先ほどまでピッチに立っていた神田先輩だった。

「大丈夫？つてそれより顔を隠したまま後ろに下がるなんてー」  
と笑いだす先輩。

初めて話しかけられたのはこんな恥ずかしい姿で。  
違った意味で涙がでそうだった。

すると

「なにしてるのかな？」



と後ろから声がした。

私は先輩に支えられたままで、慌てて離れて振り向くとそこにはにっこり微笑むあの彼女がいた。

「あつ、違っんです。」

何が違うのかも良く解らなかったけど一応そんな声を出してみたりして。

彼女は意味深な笑みを浮かべ私の顔をみると、神田先輩に向かって

「いいのかな？言っちゃおうかなあ」  
なんていい始めた。

「樹里、ちよつとまった。俺は転びそうになった彼女を助けただけで……」

と言い目を見開いた先輩。

私は周りも見ずに

「すみませんでしたー」

と元いた場所へと駆けてきてしまった。

何だっただ、一体。

ちよつと前だったら興奮してきつと1週間は寝付けなかっただろう出来事。

先輩と話したうえに、転びそうになった私を助けてもらえるなんてそれにあの人、先輩の知り合いだったんだ。

そりゃそうだよ、同じ学校だったら知り合いの可能性の方が高いよね。

そしてまた、今野と彼女が並んで歩くあの姿を思い出してしまった。  
うちの制服を着ながら堂々と他校の生徒を応援する彼女。

樹里先輩かぁ。

辞書を思い出して、申し訳ない気持ちになった。

樹里先輩が私がおまじないしていたことを知るわけないけど、もう一度後ろを振り返って、ペコリとお辞儀を試みた。

顔を上げるとそこにはもう一人増えていた。

一人というのは、そう今野。

後ろ姿だけでも直ぐに解っちゃうなんて重症だよ。

心の中で呟いた。

皆のところへ戻るとすかさず麻耶が

「まだ少し目赤いよ。」

と心配そうな顔をしてくれた。

歩美は

「大丈夫、先輩の姿みたらそんなの吹っ飛んじゃうから。」  
って言われてしまった。

さつきその先輩と話してきたよ、なんて言ったら質問攻めに合いそう  
うだ。

本当は違う人をみているのにね。

そうこうしているうちに後半が始まった。

先にボールを操ったのはうちの高校だった。

1人かわし2人かわし、後半が始まって間もないのにどんどんゴールへと近づいていく。

そして、ゴール間近のサイドで、神田先輩にボールが渡った。  
こちら側からの応援の声がより一層高まって、凄い声になった。  
あちらこちらから

「神田ー」「神田先輩ー」

などの声が飛んでいる。

私の隣の麻耶たちも例外ではない。

「あんた何ボヤつとしてるの、早く応援しなさい!」  
って突っ込まれた。

でも出来ないよ。

だって、今日の前では必死にボールを奪い返そうと、神田先輩に今  
野がついてる所だったから。

心の中では誰にも負けない声で今野に声援を送っていたのだから。

息を呑む展開というのはこういうことをいうのだろう。

先輩も今野も一步も譲らず、ボールに食らいついている。

そして、一瞬の隙をついて、神田先輩が前へ出た。

あっという間の出来事だった。

そして、そのままシュートを決めた。

ワァーッと歓声が湧き上がり、手を叩く周りのみんな。

でも私は、手を叩くこともせず今野を追っていた。

今野は一瞬膝をついて、項垂れたが直ぐに立ち上がり、自分の定位  
置へと戻っていった。

こんなに真剣な顔をしている今野は初めてみた。  
格好よかった。

一秒一秒、時間が経つ程に今野の事が好きになってしまふ私がいた。もうどうしようもない位に。

結局試合は1 - 0のままうちの高校が勝った。

試合が終わってもみんなの興奮は冷め遣らず

「やっぱり、神田先輩はカッコいいね。」

なんて、先輩の話でもちきりだった。

そんな中、歩美が

「でもさあ、あの神田先輩に引ッ付いてた15番もカッコよくなかった？」

といい始めた。

麻耶も

「やっぱり、私もちょっと思った。今度チェックいれちゃおうかな」

って。

15番、今野のことだ。

愛だけは解っているから、困ったような顔をして私を見ている。

麻耶は

「でも香梨菜は先輩だけを見てればいいんだからね」

私はまた言うタイミングを逃してしまつたみたいだった。

そして、みんなで校門の前までくると突然麻耶が声をあげた。

「ねえ、ねえ、あれ15番じゃない？誰か待ってるのかな？」

相手チームはとっくに解散していた。

きつと樹里先輩を待っているんだろう。

私はそんな場面を見たくないなので足早に通りすぎようとしたその時。

「よう」

と今野が口を開いた。

「お疲れ、残念だったね」

と返した。

話掛けないで、樹里先輩が来るまでのつなぎなんて耐えられないから。

そう思っていたのに、今野はまた話掛けてくる。

「お前、もう帰るの?」  
と。

隣で麻耶たちが知り合いなの?と興味深深的顔でこちらをみている。  
もう限界。

「じゃあ、またね」

と行こうとしたら、

「一緒に帰ろうぜ。」

と言われた。

一緒に帰ろうぜ?まさか樹里先輩と3人で?

冗談じゃない。

これ以上私、落ちたくないから。

そう思ったのに

「じゃあ、また宜しくねー」

と愛が麻耶たちを引っ張って行ってしまった。

愛一っ、なんて事を。

しぶしぶ、今野の顔を見ると、ポリポリと頭を掻きながら

「行こうぜ。」

と私の前を歩き始めた。

2人で？樹里先輩は？

そうは思ったものの、周りには私しかいなくて。

急に鼓動がせわしくなる中、私は今野の背中を追いかけた。

告白?!

私とは違う大きな背中をみながら歩き始めた。  
何か話せばいいのに何も浮かんでこない。  
すると今野が私の方を向いて

「浅田って歩くの嫌い？」  
と聞いてきた。

「嫌いじゃないよ」  
と答えると

「じゃあ、天気がいいから、歩いて帰らない？」  
と言ってきた。

別に歩くのは嫌いじゃないけど、ここから家までどれだけかかるの  
だろう？

それに会話が続くかどうか……  
私が不安そうな顔をしていたのに気がついたのか

「やっぱりバスで帰るか。」  
と言い直した今野。

ちよつとした微笑にも反応してしまう私。  
きつとこんなに長く話せるのも最後かもしれない。  
そう思った私は

「いいよ、天気もいいし歩いて帰ろうか！」  
と返事をした。

今野は一度フツと息を吐くと

「おう」

と返してきた。

そして暫しの沈黙。

さつきと違うのは私は今野の後ろではなく、隣を歩いている。

それだけでも、嬉しく思ってしまうのだけど、家に着いたら泣いてしまいかもなんて、マイナス思考に囚われてしまう。

「この辺変わらないよなあ」

「そうだね」

こんな調子で取り留めのない会話が続けている。  
どことなくぎこちない会話。

私といえば、この前バスの中からみたこの道。

こんな風に今野と歩く樹里先輩のことを考えずにはいらなかった。  
あの時と同じように私達の横をバスが通り過ぎた。

「お前さあ。」

今野は前を向いたまま話出した。

「ん？」

「お前も、おまじないしてたんだろ。」

唐突な話に心臓が止まるかと思った。

もしかして、私が今野のイニシャル書いたの知ってるの？彼女との仲を裂こうとしてるって非難されちゃうの？



後から考えたら、そんなことばれる訳がないのに、動転してしまって私の頭はパニック状態。

今野はそんな私におかまいなく話を続けた。

「俺、従兄弟がお前の高校にいておまじないの話聞いてたんだ。あの時4葉探してたんだろ。」

優しく語りかける今野に思わず頷いていた。

「上手くいきそうなのか？」

なんでこんな事今野にきかれなきゃいけないだろう。

泣きそうだった。

でも必死で涙を堪えて

「駄目かなあ。私、好きになちゃいけない人好きになっちゃったから……」

「好きになっちゃ駄目な人なんているのか？」

だから、あんたなんだって。

言ってしまういたい衝動に駆られる。

ぐつと堪えて

「私の好きな人ね、とっても仲の良い彼女がいるの、私の入る隙間なんてこれっぽっちもなくて。」

涙が零れないように上を向いた。

「そんなに好きなんだ。」

今野が言った。

「うん、好きになっちゃった。」

誤魔化すようにペロツツと舌をだしておどけてみる。

「そんなに、好きなんだあ。」  
もう一度今野が呟いた。

「うん。」

「諦められない？」  
と聞く今野、だからあんたの事なのに。

この会話を一刻も早く終わらせたかった。  
どうせこれが、今野と話せる最後だったらもつと楽しい話をしたかったから。

「そんなことより今日の試合惜しかったね。凄いじゃん、1年でレギュラーだなんて、それもスタメンなんだもん。びっくりしちゃったよ。」

本当はかつこ良かったよ、って言いたかったけど。  
私はさっきの今野の姿を思い浮かべてちよつとトリップしてしまった。

「そんなことよりって、お前。」  
折角話を変えたのにまた蒸し返そうとしているのか今野は私に問い直す。

「もしかして、お前の好きな奴ってサッカー部なのか？だから今日見に来たのか？」  
少し険しい顔をして核心を突いてきた。

だから、あんたを見に来たんだってば。

喉から出てきそうになる言葉をグツツと飲み込んだ。

「そうなのか？もしかして。」

そう言っただけり口を噤む今野。

もしかして、ばれちゃった？

今まで以上にドキドキしてきて、何とか話を逸らさなくちゃ。

「それより、彼女はどうしたのよ。私と一緒に帰って大丈夫なの？私恨まれるのは勘弁だから。」

また自分で言っただけ惨めになってくる。

「そんなのいねえよ。」

一際大きな声で今野が叫んだ。

いないって？だってさっき居たじゃん。

まさか他にもいるとか？

頭が混乱してきた。

「いないって、今野私に言ったじゃない、彼女がいるって。」

かなりややケだ。

思っただけを口にした。

「あ、あれは……」

さっきの勢いはどこへやら今野の声は小さくなって。

そして、一息したあと。

「弘樹なのか？お前の好きな奴って。諦められないのか？」

今野はそう言っただ。

弘樹って呼び捨て？

私は一瞬戸惑って返事を出来なかった。

それよりさっきの彼女いない発言が気になってしょうがない。

大分歩いていたみたい。

辺りは見知った風景で、私の家は目前だった。

最後でいいや、言ってすっきりして振られちゃえ。

大きく息を吸い込み

「今野が好きなの。」

「俺にしとけよ。」

2人の声が重なった。

???

何て言った？今野の顔を見ると向こうもきょんとしている。

私は、立ち止まり今野を見つめてしまった。

好きになってもいいの？

私も今野も無言だった。

2人とも頭の中を整理しているかのように。

そして、今野が口を開いた。

「俺が好き？」

俺が好きって。

私が聞きたい

俺にしとけ

ってどういう事？

私は訳解らなくて。

だって、彼女がいるって言ったのは他でもない今野だし、この前みた樹里先輩との2ショットは？仮にも先輩じゃないとしてもあんな風に彼女以外とも話すもんなのだろうか？他の子にもあんな風に話しかけているの？

おまけに俺にしとけて。

これを理解できる人がどれだけいるのだから。

頭の中を整理するのに精一杯で私は今野の問いに応える余裕なんてこれっぽっちもなかった。

「浅田。」

私の名を呼び再び答えを促す今野。  
私は疑問の1つを投げかけてみた。

「樹里先輩は？樹里先輩が彼女なんじゃないの？」

すると今野は

「どこからそんな発想が出てくるんだ。樹里は従姉妹だよ。俺の母さん3姉妹なんだ。母方の従姉妹。」

そうだったんだあ。

じゃあ彼女って？

「じゃあ、彼女は他にいるの？」

次の疑問を投げかける。

今野は困ったように顔を顰めた。

「駄目だったんだ。」

ぽつりと呟く今野。

駄目って何が？振られちゃったとか？

呆気にとられる私を尻目に今野はゆつくりと話だした。

「ずっと、好きだったんだ。高校が違えば忘れられるってそう思ってたんだ。勝手な話だけど俺にはその頃彼女がいて、彼女に言われるがままに付き合っていたんだけど……」

切なそうな顔をして上を向いた。

誰を想ってそんな顔をするんだろう、胸が苦しい。

「付き合っていくうちに、そいつのこと好きになるって思っていたんだけど、俺の目はいつも違う方を向いていた。時間が経てば忘れられるなんて嘘だよ。時間が経てば経つほど気になってしょうがないんだ。あいつはそんな俺に気がついて、別れたんだ。高校に入っ

てからは誰とも付き合っていないんだ。」

今野の顔は上を向いたままでその表情はみれなかった。ただ次の瞬間私の顔を見て

「この前偶然会ったんだ、一目で解ったよ例え後姿だろうが迷いもなくな。だから駄目だったんだよ忘れるなんて。」

そこまで聞いても核心に迫れない。

誰に会ったの？元カノ？それとも……

「浅田だよ。お前に会ったんだ。」

私は

「だって、あの時彼女がいるって、忘れてくれって言ったじゃない。」

と叫んでしまった。

「あの時、俺、思わずお前が好きだって言いそうになって。慌てて初恋だなんて言っちゃたんだ。さっきも言ったように知ってたんだ、お前の高校に恋のおまじない。直ぐにピンときたよお前が4葉のクローバー探してるって事。それって好きな奴がいるってことだろ？言えるかよそんな奴に。だから、自分自身にブレーキをかけたんだ。そうでないとやってしまいそうだったから。それに辺に気を回されて次に会った時に避けられでもしたら立ち直れないと思って。」

自分勝手だよな最後にぼつりとそう呟いた。

私、好きになってもいいの？

今野を好きでいいの？

心の中で思ったことが口に出ていたらしい。

次の瞬間凄い力で引き寄せられた。  
すっぱり埋まってしまう私の身体。

好きでいてくれ

今野は私の頭に顔を近づけ振るえる声でそう言った。

私の背中に回る今野の腕。

私の顔はぴったりと今野の胸におさまって、今野の心臓の音はつきり聞こえる。

歩いたせいなのか、それとも私と同じ理由だろうかその音は私という勝負。

思わずおろしていた手を今野の背中に回してしまった。

全身が一気に熱くなったのが解る、きつと顔は真っ赤だ。

その時急に場違いなメロディが、今野の携帯だ。

咄嗟に今野の背中から手を引いた。

今野は無視をしようとしていたのだろっけど一向に鳴り止まず、

今野は”ちっ”と舌打ちすると私の背中から手を外し携帯を耳に当てる。

「後で掛ける。」

そう一言だけいうと電源を落としてポケットにしまった。

照れくさくて顔を見れなかった。

そして、はっと気がつく。

夢中で話をしていたから気にもしなかったけど、ここは道路の真ん中で。

家への距離わずか50メートル。



慌てて辺りを見渡して知ってる人がいないか確認する。

今は…大丈夫だね。

恥ずかしさがピークに達して慌てて会話をしようと

「携帯大丈夫だったの？」

と聞くと

「弘樹だったから。」

という今野。

「弘樹って、神田先輩？」

知り合いなんだね。それも携帯の番号を知っている。

「従兄弟なんだ、母方の。弘樹に樹里に俺。兄弟みたいに育ったから。」

そういつて微笑む今野。

そっか、そうだったんだ。

みんな親戚だったんだ。

だからあんな風に自然な感じだったんだ。

一人納得してみる。

もう少し、もう少しだけ話したい。

今野のジャージを引っ張って、近くの公園へ行かない？と誘った。

それだけでも凄い勇気だった。



## はじまりは公園で

私は今、今野と2人並んで公園のベンチに座っている。

自分で公園に行かない？なんて誘った癖にこの後の事を全く考えていなかった。

ちよつとこの際頭の中を整理しよう。

私は今野が好きだと言ってしまった。

今野は私に俺にしろと言って、私が好きだといってくれた。

樹里先輩と神田先輩は従兄弟で

それで…

黙って座っているこの状況は？

もしかして私から付き合ってくださいと言わなくちゃいけないということなのだろうか？

思わず今野の顔を見つめてしまった。

彼は顔を背けてしまつて。

一体この状況どうすればいいんだろう。

もう少し話がしたい。

本当は聞きたい事は山ほどある。

よしここまできたら同じだね。

心の中で気合を入れて

「あのね、私。」

そこまで言って一度呼吸を整えた。  
今野は私を見て一度ゆっくりと頷いた。

「私、クローバーにね。KとHって書いたんだ。」  
伝わりますように。

そう、思っただらうと今野の顔を見上げた。  
彼は少し苦しそうな顔をした。  
そして

「やっぱり。弘樹の事……」  
そう言って黙ってしまった。

うわっ。

忘れてたよ、自分で気がついてたのに。  
思いっきり勘違いしている今野の袖を引っ張った。

「違うよ。私が書いたのは 今野のKと陽人のHだったんだよ。」  
思いがけず大きな声になってしまった。  
でも今野はまだ曇った顔のまま。

「だって、あの時お前、気がついてなかったって……そう言ったじゃないか。」

私の声とは対称的に呟きともとれる小さな声だった。

そんな今野の顔を見ていられなくなって、恥ずかしいけど、恥ずかしかったけど。

「だから、あの時の今野の笑った顔が頭から離れなくて。目を瞑っても浮かんでくるのは今野の顔だった。神田先輩に話しかけられたってドキドキしなかったの。私が 私が試合で目を追っていたのは

今野だけだった。今野にしかドキドキしなかったんだから。」  
言ってしまった。

女は度胸とは言ったものだ、でも恥ずかしすぎて顔を上げられない。  
今野の足だけが目に入った。  
そして、今野は黙ったまま。

どれくらいの沈黙があったのだろう。

さつきとは違った意味のドキドキで私の心臓が加速する。

「凄い情けないんだけど。俺にしとけなんて言っておいて、今更だ  
けどまだ信じられないんだけど。勘違いじゃねえよな。」  
そう言う今野に私は頷いた。

「ウオッシャー！」

そう言っただけで突然立ち上がった今野。

私はただただビックリして。

そうしてまた私はいつの間にか再び今野の腕の中にいた。

「大事にするから、一緒にいて欲しい。」

今さっきの雄たけびとは全く違う静かな声だった。

「それって」

そこまで言っただけで私の声は今野の声で遮られた。

「付き合っただけ。俺の彼女になって欲しい。」

私は言葉より先に今野の広い背中に手を回した。そして

「嬉しい。嬉しいよ今野。」

そこまで言っただけ

タッタラッタ

と聞える携帯の音。

言わずと知れたルパンのテーマ。  
私の携帯だった。

2人で顔を見合わせて笑った。

「でなくていいの？」

という今野に

「大丈夫。メールだから。」

と携帯を取り出して開いて見せた。

解っている、この着信は麻耶たちだ。

2人で画面を覗いてみるとそこには

「ちゃんと報告してね」

という文字と3人でケーキを頬張る姿が添付されていた。

「了解」

と短く返事を打ち今野に向き直る。

「今度紹介していい？」

と聞いてみた。

「彼氏としてなら。」

そう言いながら今野はあの顔をした。

あの公園で見たとびっきりの笑顔だった。

それから、私たちはナンバーとメルアドを交換して。  
とりあえず今日はこの辺でと帰ってきた。

ふわふわした気持ちで自分の部屋に入る。

さっきの今野じゃないけど急展開に信じられない気持ちの方が大き  
かったりして。

携帯を開いて

今野陽人

という名前を確認してしまう。

自然と笑っている自分がいた。

そして、机の中からそつと英語の辞書を取り出した。

531ページ

小さいけれどそれはしつかりその間に挟まっ  
ていて。

思わずこみ上げてくるのが。

ありがとう

小さな声で4葉にお礼を言ってみた。





## 一夜明けて

「香梨菜、遅刻するわよ」

んっ

軽い伸びをして目覚まし時計を手取る。

いつもだったら、朝食を食べている時間だった。

あんなことがあって誰が寝れるというのだ。

全くといっていいほど寝付けなかった私。

いつのまにか寝ていたけれど……

また思い出しちゃったらドキドキが再発してしまった。

かなりの重傷だ。

ふと携帯を見ると着信ランプの点滅が！

片手で胸を押さえ携帯を手取る。

開いてみるとそこには

今野陽人

の文字が。

メールの着信だった。

時間は今から30分前で

「おはよう！これから朝練だー。昨日の試合で負けたからみんな気合入って大変だよ」

と書いてあった。

私は着替えるのも忘れ携帯と睨めっこ。

はて、何を書こう。

暫し考えたのだけど結局

「おはよう！部活頑張ってね。ファイト！」  
とだけ送ってみた。

昨日の晩、麻耶たちにはメールを送っておいた。

直ぐにみんなから返信がきてそれがまた恥ずかしいのなんのって。  
改めて余韻に浸ってしまった。

「香梨菜」

下からお母さんの声が段々近づいてくる。

トントンと2回ノックした後にお母さんが顔を出した。

「あら、まだ寝ているかと思ったわよ。本当に遅刻するわよ、早く  
着替えて食べちゃいなさい。」

「はい」

私の返事を確認した後、忙しそうに階段をパタパタと下りていった。  
顔が赤いのばれてなかったかな？

ちよっと心配したけれど、そんなことを言っている場合じゃない、  
着替えて着替って。

顔を洗いキッチンへと急ぐ。

キッチンのテーブルの上には食べやすそうなおにぎりが一つ置いて  
あった。

「時間がなくてもそれだけは食べちゃいなさいよ。」

お母さんの声に頷き、いただきますと言うと同時におにぎりにかぶ  
りついた。

テレビを横目で見ながら、お茶と共におにぎりをたいらげた。  
歯磨きをして、いざ出発！

きつと質問攻めにあうんだろうな。

バスに揺られながら、そのことを想像して身震いしてしまった。

行きたくないかななんて思ったりもしたのだけど、この前のずる休みもあるしな。

そうこう考えていたら下駄箱の前だった。

いつもより2本遅いバスだったのでいつもの光景とは違うものだった。

丁度朝練を終えた運動部の面々が靴を履き替えているところだったのだ。

そこにはサッカー部もいたわけでして。

学校が違うのだからいるわけがないのに、この集団の中から現れる今野の姿を想像してしう自分。

相当重傷だ。

「浅田さんおはよう。」

声をかけられ振り向くと、そこには爽やかな笑顔の先輩がいた。

「お・おはようございます。」

突然の神田先輩の登場にあたふたしてしまった。  
とりあえず声がでたのは良かったのだけれども。

目の前にはにこやかに微笑む先輩。

????どうして私の名前を知っているんだ?

私の顔を見ていただろう先輩は

「うん、陽人の言ってるのが解る気がするよ。」  
となにやら納得した様子で。

陽人って。

今更ながらに従兄弟だったことを思い出す。

それにしても今野は私の事なんていったんだろう？

そっちのほうが気になった。

そのまま固まっていた私に先輩は

「そんなところに立っていると遅刻するぞ！」

と一声掛けてサッカー部の人達に紛れていった。

いけない！私も急がなくちゃ。

チャイムと同時に席に着いた。

あちらこちらから視線を感じるのは気のせいじゃないだろう。

恐る恐る愛のほうを見ると案の定軽い笑みを浮かべこちらをみていた。

きつと、麻耶たちもだろうね。

また今野のサッカーしている姿みたいなの

などと浮かれていて授業なんて上の空。

チャイムが鳴ったことさえ気がつかなくったくらいだ。

「なーに？もう幸せボケですか？」

麻耶に頭を小突かれる。

「そんなんじゃ……」

当たっているかとも思いつつそんな返事を返してみたり。

「ほらほら、そんないじめないでよ。」

そう言ってくれるのはやっぱり愛だったりするんだよね。  
なのに今日の会いは一味違った

「それで、私も実は興味あるんだよね。昨日のその後に。」  
愛ってば、今日は味方じゃないのね。

「それでそれで！」

そんなことをいわれ思わず思い出してしまった今野の腕の中。  
顔が沸騰してしまった。

きつと頭の中から湯気でも出ているんじゃないかって程。

「なに、思い出してるのよ。何だかエッチだね香梨菜って。」  
だの

「早く聞かせて」  
だの

一度深呼吸して呼吸を整えると、より一層3人の顔が近づいてきた。  
一瞬のけぞってしまった私。  
だって凄く恐いんだもん……。

「あのね、えーっと……」  
何から話せばいいのだから詰まってしまったその時に

「浅田ーっ。お前神田先輩と知り合いだったのか？」  
教室中に響き渡るその声。  
サッカー部の山城だった。

山城の声にクラスの面々が反応して興味津々の目が私に集中してしまっ  
った。

「な、なんで？」

私の方が聞いてしまった。

「いやー、今日の朝練の後にお前の事聞いてきたからさ。あの神田

先輩に話し掛けられて緊張しちゃったよ。」

彼には何の悪気もないのだろうが、さつきから周りの女の子の視線の痛いことつたらない。

「知り合いの親戚だったみたくて、それでかな？」

あえて彼氏とは言わなかったけれど、私の答えに山城も周りの女の子も少しは納得してくれたみたいで、山城は

「そうなんだ。」

といって何処かに行ってしまった。

ふっと一息入れると、目の前にはまだ難関が。

「聞いてないんだけど。」

少し低い声で麻耶に突っ込まれる。

「だから、それをさっき言おうとしてただけだね。」

ごまかし半分舌を出しおどけてみせた。

それから少しの間、無言のプレッシャーが続いていました。

「今野って神田先輩の従兄弟だったんだよ。それが解ったのは昨日の事で実をいうと私もまだ信じられない状況です」

「へーそれはまた随分と世間は狭いもんだね。」

感心したように3人は頷きあっていた。

本当だね、私が一番そう思ってます。

山城の乱入があったせいで休み時間はあっという間に過ぎてしまった。話の続きはまた後でとみんな席に戻っていった。

何でこんなに緊張しなくちゃいけないのだろう  
憂鬱だ。

## おおきな手

「なるほどねえ」

やけに気になる言いかたじゃないですか。  
歩美はニヤついた笑いを浮かべ

「本当にそれだけなの？実はもうー」  
その探る視線はなんなのでしょう麻耶さん。

愛に至っては瞳が語るというのでしょうか……

私すごく居心地悪いんですけど。

今は昼休み真つ最中の屋上だったりする。

お弁当を広げながら、今日何度目かになるだろうそんな会話。  
でもまあこれで麻耶や歩美に対しての隠し事も憂鬱な気持ちもやわらいだからそれで良かったのかもな。

「またあんたトリップしているの？いいね、初々しくて！」

そんな言葉ももう何度目なのか。

だからあんた達事考えていたんだってば！

心の中で反論した。

その時場違いな音楽が

私の携帯だった。この音楽は今野からのメールだ。

私はポケットに手を伸ばしそつと携帯をさぐる。

途端に3人の顔が近づいてきた。

「遠慮しないでいいんだよ。見ればいいじゃん。」

「う・うん」



思わずどもってしまふ私。

これじゃあ皆の思う壺だと思いつつも、メールが気になる私。  
後ろを向きつつ携帯を開いた。

「今日帰り暇？」

それだけ書いてあった。

暇といえば暇なんだけど。

取りあえず

「暇だよ」

浮こうがそっけなければこっちもそっけない。

用件だけを返信してしまった。

それを盗み見ていた麻耶に

「あんた達熟年夫婦みたいだね。とても付き合いたての2人には見えないって。」

「そうそう、私達だってそんなそっけないメールしないって。っていうかそんなメールした日には大ケンカ確実よ。」

と歩美に呆れられてしまった。

そして、ちよつと貸しなさいという麻耶にあつという間に携帯を取り上げられて、何やらボタンを押し始める麻耶。

ちよつと止めてってば！

大きな声を出すも、もう遅し。

帰ってきた携帯にはそれはそれは大量のハートマークと

何処かに行くの？嬉しいよ。

の文字が。

顔面蒼白だ。

隣で”ちよつとやりすぎだよ”と愛の声がした。

すると直ぐにまた着信音。

思わずビクツとしてしまった。

携帯をあけてみるとそこには

これまた画面いっぱいハートマーク！！！！

そして

俺も嬉しい。行く場所は秘密だよ。

の文字が。

どうしちゃったの今野？！

その謎は直ぐに掛かってきた携帯で解けることになる。

「俺……。今の無理やり友達を送っちゃってその」

言葉に詰まってしまふ今野。

私は今野の言葉を遮り

「私もおんなじだよ。友達がね、送ってくれたの。でも誘ってくれて嬉しいのは本当だよ。」

小さい声だけどそう今野に伝えた。

今野との会話は放課後の待ち合わせ時間と場所を決めて終わった。

甘い雰囲気も何も無く、でもそれは聞き耳立ててるこの人達がいるせいなわけで。

きつと向こうも同じだと思う。

6つもの目が私を凝視していた。

「もう！恥ずかしいじゃない。」

私は、本当に恥ずかしくって、その場を立ち上がり、教室へと走ってしまった。

待ち合わせか！。

誰もいない場所について改めてにやけてしまう私だった。

そして放課後。

何とか3人を振り切って待ち合わせの場所にきてみると、既に今野が待っていたのだった。

「待った？」 そう言った私に今野はあの笑顔で

「今来たところだよ。」  
と返してくれた。

じゃあ行こうかと歩き出す今野の後ろを着いて行く。

大きな背中を見つめているとふと立ち止まった。

そして、右手を差し出した今野。

私はためらうことなくその手を取った。

大きくてあったかい今野の手。

少し緊張してくれたのだろうか。

しっかりと握り締められたその手は、私の手と同様、少し汗ばんでいるようだった。

そんなことも嬉しくって。

暫く歩くと、一瞬手を緩め私の手を握り直した。  
指と指が絡まった、所謂恋人つなぎ。

今野が彼氏になった事を実感した瞬間だった。

## 喫茶店

大きな今野の手に私の手が包まれて。

まるで手が別の生き物のようにドクドクしているみたいだった。緊張してしまっているせいか中々言葉が出てこない。

2人で黙々と歩いているこの状況ってどうなのかしら？でも不思議と嫌な感じはしなくて。

半歩先行く今野に引つ張られているみたいについて行く。地元だから良く知っているつもりだったけれど、表通りから一本入ったこの道は通ったことがなくてきよろきよろしてしまう。そんな私に今野は笑いながら

「大丈夫、変なところに連れ込むわけじゃないから。」  
と言ったのだけれど、私はその言葉に身構えてしまって、踏み出す足が小幅になってしまった。

連れ込むってー

「浅田？」

優しい声に反応してしまう私の顔。

「何でもないよ。」

そう言ったのだけれどさっきの連れ込む発言が私の頭の中をぐるりと回ってしまっている訳でして。いらぬ想像をしてしまった。きっとこの前のことがあるからなんだろう。

嫌な事なんてない、反対に……

いけない、いけない。そうは思うのだけれど、とことん変な方向に

行ってしまう私の頭の中。

何か違う事を考えなくちゃ。

そうだ、会話会話。

何か話せば大丈夫、とは思いつつも何を話せばいいのか分からないんだよね。

すると、今野方から話掛けてくれた。

「中学の時はさ、こうやって手を繋げるだなんて思わなかったよ。ふざけて笑いあつて、お前直ぐムキになってからかわれた奴の背中とか叩きにいったら、勿論俺もそんな一人だったけど、お前が他の奴追いかけていくと目で追って、止めるーって念力送ったりしてた。って何いつてるんだか俺。」

私にとつたら爆弾発言だからそれ。

私の顔で水が沸騰するかもしれない。

それ位顔が熱くて……。

「言ってくればよかったのに。」

と思わず呟いてしまった私。

途端に握った手がぎゅっとなつて。

ちらつと今野の顔を覗いてみると今野は上を見上げていて、顔は見えなかったんだけど、耳が真っ赤で。

それを見ている私も負けじと真っ赤なわけで。

すれ違う人がいなくて本当に良かったかも。

そして、また沈黙が始まってしまった。

中学の頃はぼんぼん言い合っていた仲なのにね。

「あそこだから。」

の声に目を向けるとそこには可愛いお花に囲まれた一軒の喫茶店？  
初めて見る所だった。

こんな近くに可愛いお店があるなんて、驚きだよ。

まだ新しいらしく、ベージュ色の壁には少しだけ蔦がはつていた。  
お店の周りは色とりどりの可愛いお花がめぐらせてあり、厚みのあ  
りそうな深いこげ茶のドアには金色の鐘が付いていた。

今野君は迷う事なくそのドアを開けた。

同時に澄んだ音色の鐘の音がした。今野とはちょっとミスマッチか  
も思ったのはいえないね。

一歩足を踏み入れると、木の香りがふわーと広がった。

そして、次に香ばしいコーヒーの香り。

一瞬で虜になってしまった。

店内を見渡すと

「いらっしやい。待ってたわよ。」

とにつこり微笑む樹里先輩がいた。

言葉が出ずに大きく頷く。

「連れてきてとは言ったけれど、ここまで見せ付けてくれるとは思  
わなかったわ。」  
と。

目線を辿ると、私達のしつかり繋がれた手だった。  
慌てて手を離れた。

「あらら。余計な事言っちゃったかしら。」  
そう言う樹里先輩に大きく手を振って

「そんな事ないですから。」と口籠ってしまった。

じゃあこちらへどうぞ。

と部屋の角にあるテーブルに案内された。

「ブレンドな。浅田はどうする？」

ここに来て初めて今野が口を開いた。

同じものがいかなと思ったのだけど、目に入ってしまったあの文字が。

「カフェオレお願いします。」

私が注文すると、樹里先輩はにっこり笑って”お勧めよ”と言った後にカウンターに向かって

「ブレンド1つに、カフェオレ2つです。」

カフェオレ2つ?と思うまもなくはじめからそのつもりでいたのだろう、当たり前のように私の隣に座ったのだった。

私は緊張して、目の前のテーブルに視線を落とした。

あっ

重厚な感じの深いこげ茶色のテーブルには透明なテーブルクロスがかけてあつて。

その真ん中には、落着いた色の和紙、そして その和紙にちょこんと置かれた4葉のクローバー。

隣のテーブルにも後ろのテーブルにも大きいものや小さいものなど



大きさは様々だったが、やっぱり4葉のクローバーがあつたのだつた。

素敵

思わず口から言葉が漏れた。

「気が付いてくれたんだね。」

樹里先輩はご機嫌なようだった。

今まで黙っていた今野君が口を開いた。

「ここは俺達の祖母の家があつたんだ。喫茶店を開くのが夢だったんだって言つて。思い切つて喫茶店に改築してしまったんだ。」

ここにおばあさんの家があつたんだ。  
結構近くなのに知らなかったな。

「そうそれで、今あそこのカウンターにいるのが私の母で、一応このオーナーなの。」

見ると、樹里先輩によく似た素敵な女性がサイフォンを暖めていた。すると目が合つてしまつて、慌ててお辞儀をした。

樹里先輩のお母さんは柔らかな笑みを浮かべてお辞儀してくれた。

そして、さっきの一言が気になった。

「一応って?」

何となく樹里先輩ではなく今野を見てしまった私。

「じゃんけんだったから。」

ぽつりと今野が呟いた。

「そうじゃんけん。だからみんな分かっているけどすねちゃってね。特に陽人のおばさんなんて、もう二度とグーは出さないって凄かったわよね。」

「そうだったな。でも家ではけろつとしてたけどな。」

「そうだったの？それは初耳だよ。」  
と樹里先輩が怪しげな顔をする。

ほんの少しだけど、今野の周りの話が聞けて嬉しくなってしまう私  
がいた。

カランと鐘のが響いた。

スポーツバックを片手に入ってきたのは神田先輩だった。  
その姿を見ていたら、急に今野が立ち上がった。

帰っちゃうのだろうか？と私も立ち上がろうとすると、先に樹里先  
輩が立ち上がった。

「ハイハイ、分かってますって。」そういつて今野の座っていた席  
へ。

今野は私の隣の席に。

「よう、丁度、席替えタイムだった？」

樹里先輩と目配せする神田先輩は確信犯だろう。

「煩いって。」

そついう今野は照れているようだった。

「こんにちは浅田さん。何か浅田さんって呼び辛いな。香梨菜ちゃんでもいいかな。」

これぞ必殺スマイル。

「はい。」

と返事をした。

ちよつと前まではこのスマイルに何度やられてしまったか。

でも不思議、こんなに近くで神田先輩が私に微笑んでんくれているのにあの頃のと きめきは全く感じなくなっているのだから。格好いいとは勿論思っ けれどね。

つて私、一瞬でこんな事を考えてしまった。

テーブル下では今野の手が私の手を握り締めていた。

## 憧れと好きの違い

神田先輩は話してみたら、とっても面白い人で何度大きな口をあけてしまったかわからない位だった。

ただかつこいいだけじゃなかった事に改めて凄いつつも、いかに表面だけしかみていなかったのだと思い知らされた感じがしてしまった。

それにしても……さっきから今野の手は繋がれたままで、私が笑う度にその手が一層強く握られた。

カウンターから樹里先輩を呼ぶ声がした。  
だけど、立ち上がったのは神田先輩。

手で樹里先輩を座っているよと言う風に促しカウンターに向かった。

その時の樹里先輩の顔を見ていたら何となく状況が読めてきた。  
そっか、そうだよな。

こんな綺麗な樹里先輩に彼氏がないのは、きっと直ぐ近くに神田先輩がいるからなのだろう。きっと神田先輩だってそうに違いない。  
それは私の直感だった。

今野は知っているのかな。

ちらりと見る今野の顔は無表情だった。

その顔をみた途端にざわつく私の心臓。

怒ってるのかな

思わずそう思ってしまった。

自然と目が繋がれた手に向いていた。

しっかり握られた手に少しだけ安心するけども……

おまたせ

そう言つて神田先輩がコーヒーとカフェオレを運んでくれた。  
これはおまけだよ、とプチケーキまで。

ありがとうございます。

とお礼を言つた。

先輩も席に着いたので早速カフェオレを飲もうとカップを持った。  
片手だけで持つのはと思い、今野の顔を見て、繋がれた手をちよつと引いてみた。

あっさりと解かれてしまった手。

自分から引いたにも関わらず、寂しく思つてしまった。

本当はさつきから気がついている。

今野が声を出していないことに。

それに気がついてからは、神田先輩の話しもすんなりと頭に入つて  
こなくて。

さつきまであんなに笑つていた自分は何処かにいつてしまったみたい  
だった。

カフェオレに口をつけてみた。

程よいコーヒーの苦味とミルクの甘みが絶妙だった。

フォークでケーキをつまんで口に入れるとほんのりブランデーの香  
りがした。

あっさりとしたこのケーキはもっと食べたくなるような、ほっぺが  
落ちてしまいそうなくらい美味しいものだった。

大好きなカフェオレに美味しいケーキ。

嬉しくないはずなのに。

隣にいる今野のことが気になってしまつて、ちょっぴり泣きたくなつてきた。

「どうした？香梨菜ちゃん。美味しくなかったのか？」  
神田先輩の声にはつとした。

そつか、そつかもしれない。  
うぬぼれてるかもしれないけれど、きつとそうだ。  
だって、先輩がくるまでは今野普通だったし。

「いいえ、先輩。とっても美味しかったです。また来てもいいですか？もしかしたら一人でも来ちゃうかも。」

「絶対こいよな。香梨菜ちゃんだったらいつでも大歓迎だよ。」

先輩がそう言つてくれたところで私は立ち上がった。

「本当に美味しかったです。これから私ちよつと出掛けたいところがあるので失礼しますね。」

今野はびっくりしたみたいでやつと私の顔を見てくれた。

「行こう、陽人。」

かなりドキドキしながら初めて名前を呼んでみた。  
樹里先輩が小さくガツポーズをしたのが見えた。  
もしかしたら、よそよそしい私達に一石投じてくれたのかもしれないなんて思つたりして。

だって、何回も呼ばなくてもいいところまで私の名前を呼んでいたから。

今野はというと。

耳まで真っ赤になって、そっぽを向いていた。  
でも横顔はまんざらでもない顔だね。

私は先輩達の前だというのに大きな今野の手を取って歩き出した。  
カウンターの前では樹里先輩のお母さんが満面の笑みで見送ってくれた。

繋がれた手が熱い。

今野も暖かいけれど、私のそれとは比較にならないほど。

神田先輩とは話していて楽しいけれど、ドキドキはしないんだ。

今野の表情一つで私の心は激しいほど上下してしまう。

これが、憧れと好きの違いかもしれない。

今野のことで頭がいっぱいになってしまっ、もうどうしようもないほどに。

#### 4 葉のクローバー

喫茶店から私の自宅までは歩いててもそんなに距離はなかった。  
まだ時間は大丈夫。

今なら、日が落ちるまでには間に合いそうだ。  
私は自分から今野の手を取った。

「今度は、私に付き合って。」  
そういうと

「何処へでも。」  
とおどけて返事をしてくれた。

今度はバスに乗る事にした。  
時間はあった方がいいからね。  
段々と近づいてくる風景に今野も

「なるほどね」  
と気がついたようだった。

そこは私達が再会した緑地公園。  
そうあの広場だ。

ぐるっと見渡す、今日は弟君いないみたいだね。  
きっと今野も同じ事を考えていたみたいで、回りを見渡すとほっと  
したように一つ息を吐いた。

「今野とはここから始まったんだよね。」

……



暫しの無言の後

「もう呼んでくれないんだ、香梨菜は。」

それは拗ねたようなそんな声。

見上げるほどの大きな身体がほんの少しだけ小さくなっているように見えた。

本当はまだ追いつかないんだよ、だってもう何年も今野って呼んでいたから。

香梨菜って呼ばれるのもくすぐったい。

だけど、やっぱり嬉しくって。

今野もそう思ってくれるのだろうか。

「陽人、一緒に4葉探そう。」

改めて呼ぶその名前にちょっと緊張しちゃって思わず探そうって言うってしまった。

こん……じゃなくて陽人の顔を見ないように芝生に目を落とした。

「4葉かあ」

そう言って、陽人も私の隣にしゃがみこんだ。

4葉を探しながら、お母さんのおまじないの話をしたんだ。

ずーっと一緒にいれますように

と願いを込めて始めたこの4葉のおまじないの事を。

陽人はその話を相槌を打ちながら聞いてくれた。

そして、話を聞き終えた後はさっきよりももっと芝生に顔を近づけてくれた。

はたから見たら何ておかしな2人だっと思うかな。  
あの時の陽人じゃないけれど、コンタクトでも探してるって思われるかもしれないね。

2人で這い蹲ってみても中々見つからなくて。

大分、太陽も傾きかけたその時、ひっそり隠れるように揺れる4葉のクローバーを見つけた。

「あつた！あつたよ。」

根元から摘んだその4葉を得意げに陽人の前に出した。

すると、陽人も

「遅いつて。」

そっついながら、私の前に4葉を差し出した。

啞然としてしまった。

確かあの時も弟君に先を越されたのだっけ。

だけど、今私の手の中に4葉があるのは紛れも無い事実。  
だってあの時は何日かけても見つからなかったんだから。

でもね、あの時すんなり一日や二日で見つけられてたら、こうやって陽人と会えなかったんだよね。  
これも、おまじないのお陰だよな。

芝生にしゃがみこみ、二人の4葉を交換して、カバンから取り出したペンで二人のイニシャルを書いた。

それを英語の辞書ならぬ英語の教科書に挟んだ私達。

まさか、陽人が一緒にしてくれるだなんて思わなかったけれど、結

構のつてくれたみたいで安心した。

だって、そんなのつて一笑されるかもなんても思ったから。

そして、陽人が言ってくれたんだ。

「ずっと一緒にいような。」  
って。

私も

「逃げ出したくても逃げられないかもよ。」  
と英語の教科書を持ち上げた。

「上等。」  
と笑った陽人。

あの時に見た笑顔と同じだった。

4葉のクローバーは恋のおまじないとなって、本当に私に恋をくれた。

4葉のクローバーのおまじない  
時代とともに変化して、沢山の人に引き継がれて。  
いくつもの友情や恋を見守ってくれていたのだろうね。  
きつとこれからも。



#### 4葉のクローバー（後書き）

ここまで読んで下さってありがとうございます！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6054e/>

---

恋のおまじない

2010年10月11日17時27分発行